

アメリカ「追憶の日」から
The Japanese Americans since February 19, 1946
酒生文弥

アメリカ「追憶の日」から
The Japanese Americans since February 19, 1946
酒生文弥

サンフランシスコに東洋人の顔をした自由の女神を創るべきだ

日系2世工業デザイナーとして全米に名を馳せた伯父トシヒコ・サコウ(1929-1999)は、1978年夏初めて渡米した私にそう語りながら微笑んだ。

金門橋を日本人が初めてくぐったのは1861年。明治元年のハワイ移住を皮切りに、翌1869年には戊辰戦争に敗れた会津移民がサンフランシスコ郊外にワカマツ・コロニーを建設している。1848年のゴールドラッシュはカリフォルニアを中国人労働者で溢れさせたが、言語・文化だけでなく肌の色が異なる東洋人は当初からあからさまに差別され、1882年には中国人排斥法施行。代わって日本人が台頭した。その後メキシコ人、フィリピン人なども受け入れたが、アメリカにとって有色人種は使い捨ての労働力に過ぎなかった。

日本人の本格的な移民(74%はカリフォルニア)開始は1880年代。時給50セントの時給35~40セントで長時間働き、白人が日銭3ドルでも4ドル以上を稼いだ。1890年に2,039名だった日系移民は1900年には25,000人に膨らんでいた。勤勉と才能で白人を凌いでいくJapは、Chink(中国人の蔑称)よりずっと危険な黄禍(yellow peril)であると受けとめられていく。

大日本帝国の旭日の台頭に伴ない、アジア系移民排撃という人種差別はいきおい日本人に集中していく。日露戦争に勝利した1905年、サンフランシスコ教育員会は白人の通う小学校から日系学童90名を追放し中国系学校に隔離した。日本領事の抗議を受けて戦争で日本を支援したセオドア・ルーズベルト大統領は隔離措置を撤回させた。しかし、外交関係悪化を恐れた日本政府は今後労働移民を送らないという「紳士協定」を申し出る(1908年締結)。この自粛外交(=棄民)は日系アメリカ人を孤立させた。日系人の「写真花嫁」慣行に対する偏見・外国人土地法による土地所有の禁止・アジア人移民への排斥強化といった時流の波を被りながら、日系移民は独り苦難の道を歩むことになる。

人種差別としての日系人強制収容 (Japanese Internment)

真珠湾攻撃はすぐさま政治家・軍人・メディア・圧力団体を結束させ、「敵性」日系人の強制収容が叫ばれた。1942年2月19日フランクリン D. ルーズベルト大統領は「大統領令9066号 (United States Executive Order 9066)」に署名、全米の日系人約12万名は私財を放棄して立ち退かされ、16か所の「転住センター (relocation center)」を経て、最終的

に全米 13 か所のキャンプ（日系アメリカ人強制収容所 **Japanese American concentration camp**）に強制収容された。確かに明白なナチスシンパを含むドイツ系米人・イタリア系米人に対しても一時の拘束や尋問はあったが、白人は誰一人強制収容されることはなかった。日系人は後に 2 月 19 日を「追憶の日（**Day of Remembrance**）」と名づけ、今も民族的受難を想起する日としている。この日こそ、アメリカ白人の有色人種への根深い差別を裏づけるまさに「不名誉の日（**Day lives in infamy**）」である。ハワイでは日系人が多すぎて社会が維持できなくなるため強制収容を免れた。しかし、連合国となったブラジル、ペルー（わざわざ日系人をアメリカに強制連行して収容）、メキシコ、カナダ、オーストラリアでも同様の私財没収・強制収容が実施されたことは銘記さるべき史実である。

Allegiance (忠誠) という闘い

世界的な人気 TV・映画『スター・トレック』のエンタープライズ号唯一の東洋系クルー役で有名なジョージ・タケイ（日系米人 2 世）は、私の祖父母 酒生章秀・雅子(1 世) および伯父 1 人叔父 2 人叔母 1 人（2 世）とともに、カリフォルニアのトゥール・レイク収容所で幼少期を暮らした。有名なマンザナーなどとは違い、ここは「忠誠心調査」質問 27（命令されればどこでもアメリカのために戦闘するか?）・質問 28（米国政府に忠誠を誓い、日本国天皇への忠節を否定するか?）に **No** と答えた者（「ノー・ノー・ボーイ」と称される）が集められたキャンプである。タケイは現在ブロードウエー・ミュージカル「**Allegiance**（忠誠）」を興業している。タケイの両親や私の祖父母、1 世は日本の伝統を色濃く宿しており、タケイ自身や私の伯父叔母など 2 世はアメリカへの忠誠・同化志向が強い。**Allegiance** は、二つの祖国の間での 1 世と 2 世の葛藤を軸に、集団として人種差別と闘う日系人の収容所体験を活写している。大統領候補トランプの度重なる人種差別発言に対して、「いっしょに鑑賞して語り合しましょう」とタケイは呼びかけている。

1 世は無学で貧しい労働者であり、2 世を教育一途に育てあげた。2 世は優秀で誇り高い市民となり、理不尽で過酷な国家による差別を日系「アメリカ人」としてのプライドにかけてはねのけようとした。422 軍団（第 442 連隊戦闘団 **442nd Regimental Combat Team**）・100 軍団に志願して欧州対ナチ最前線で「不惜身命（**Go for broke!**）」の激闘を示し、太平洋戦線では情報戦に挺身した。これは白人をも括目させた決死の忠誠であった。伯父たちは幼少で大戦には参加しなかったが、伯父トシヒコは徴兵され朝鮮戦争で戦い、叔父レイモンドは海兵隊に身を投じて朝鮮戦争・ベトナム戦争を闘い抜いている。文字通り命をかけて忠誠を尽くす。日本人に宿るサムライ精神は異なる花にも受粉してみごとに開花し、人種差別そのものとの闘いにも勝利していく契機を創ったのである。

戦中のアメリカ、一抹の良心

集団ヒステリーとさえいえる日系人強制収容が冷徹に進められる中、自由・平等・博愛・人権・民主主義といった欧米の理想を体現している筈のアメリカを、良心の声で護ろうとした人々もいた。強制移住は容認しながらも強制収容は「非人道的で憲法違反」であると非難したラルフ・ローレンス・カー コロラド州知事。日系人の忠誠心を指摘して収容反対の論陣をはったエドウィン O.ライシャワー ハーバード大学講師（国務省嘱託）。人種を理由に強制収容する措置は危険であり政府方針にも矛盾する、と言明したフランシス・ビドル司法長官。「強制収容所」を「転住センター」と婉曲表記することは欺瞞であると批判したオーエン J.ロバート最高裁判事。日米激闘の最中でさえこうした良心の声があったことは特筆さるべきであろう。

ルーズベルトの奸計？

しかしルーズベルト大統領は日系人の多いハワイに危機を抱き、「オアフ島日系人を極秘身元調査、特別リストを作成し、有事には即刻強制収容」すべきとの覚書を早くも 1936 年に作戦部長に提案していた。その後日本の軍事行動が拡大しアメリカが制裁を深めるなか（40 年 9 月北部仏印進駐と日本人資産凍結・貿易制限、41 年 7 月南部仏印進駐と石油前面禁輸）、開戦 1 か月前には国内在住日系アメリカ人および日本人全員の「特別名簿」が完成している。

大統領は日系人の忠誠度調査も命じていたが、カーティス B. マンソンは「2 世の 90%以上、1 世の 75%は合衆国への忠誠を明示しており、むしろ共産主義者の方が危険」と報告した。CIA など多くの機関による調査から政府中枢は「日系人による破壊工作はありえない」と認識していた。にもかかわらず、ルーズベルトは躊躇なく大統領令 9066 号に署名し発令させた。まるで即時強制収容がオレンジ計画などにすでに暗黙に了解され、盛り込まれていたかのようである。

収容政策立案者として悪名を残すジョン・ディビット西部防衛指令区長官は、敵潜水艦誘導の危惧・武器（アメリカ人なら常識）密輸品（和食）所有・軍事施設付近居住（土地が安かったから）を具体的根拠として挙げている。が、「Jap は Jap。いかにアメリカ化しても人種的血統は薄まっていない」というあからさまな差別発言も付記している。FBI、海軍情報局、ビドル司法長官ら多くの権威が日系人は危険ではないと報告しているにも関わらず、ルーズベルトは不法な人種差別政策を決然と選んだのである。彼こそが日本に真珠湾を攻撃させる周到な奸計をめぐらしていた、という現在露見しつつある史実を傍証するものといえよう。

帰還、二級市民からの出直し

日本の敗戦、9月2日連合国への無条件降伏に伴い、強制収容所は1945年10月から12月にかけて次々と閉鎖。ハリー S. トルーマン大統領は収容者全員に「帰還命令」を発し、連行された時と同様、着の身着のままに家路に就いた。仕事・家・財産をほぼ放棄させられていた帰還者を待っていたのは「二級市民」扱いに耐えながらのゼロからの再出発だった。開戦と同時に剥奪された市民権（ドイツ系・イタリア系市民には非適用）さえ、1952年6月のマッカーラン・ウォルター移民帰化法まで回復されなかった。米兵が続々と帰国すると日系人への差別・偏見・敵愾心はむしろ高まった。「日系アメリカ人の戦後」は本国の日本人より物心ともにさらに過酷であったといっても過言ではない。

人種差別との本当の闘いは戦後に始まり、「追憶の日」を起点とする解放運動は1960年代の公民権運動へと合流して、リベラルで平和で平等なアメリカをめざす力強い歴史潮流を成していく。

311 東北大震災は日本人の驚異的な復元力を世界に示したが、戦前移民1世は艱難辛苦を耐え抜いて立身し、戦後1世2世が協働する形で「日本人の不撓不屈の精神」を全米に刻んだのである。

補償・賠償運動 - 日系アメリカ人のプライド回復

強制収容をめぐる補償と市民権回復は、全米最大の日系人団体 JACL（日系アメリカ市民協会）によって開始され、NCJAR（日系アメリカ人補償全国評議会）、NCRRC（補償賠償全国連合）と路線対立を経ながらもやがて協働へと向かう。JACL の運動は1948年立退き補償法で限定的に成功したものの、運動が勢いを得て真の成果に向かうのは1960年代後半に高まった公民権運動に触発されてのことである。

アメリカ白人文化への同化を優先するあまり、2世は3世にルーツをあまり語りたがらなかった。黒人解放に始まる公民権運動は、ヒスパニック・インディアン・他のアジア系が有色人種としてこれに連帯していく中、3世たちにアメリカ伝統の差別構造を学ばせ、それを語らない親・教科書・学校教育への憤りのうちに独自の草の根運動を展開させた。強制収容は運動の基幹に位置づけられ、ツール・レイクやマンザナールなど収容所跡地に巡礼し、ルーズベルトが大統領令 9066 号に署名した1946年2月19日を「追憶の日」と名づけて毎年関連イベントを行うなど、3世の運動は日系社会全体に強いインパクトを与えた。

世代を超えた日系人の努力は、1976年アメリカ建国200年祭でジェラルド・フォード大統領による大統領令 9066 号の廃棄と公式謝罪として結実した。日系社会は大いに鼓舞され、1978年 JACL の補償金数値目標（1人25,000ドル）設定、NCJAR の最高裁への収容違憲集団訴訟、1980年 NCRRC 結成と、運動は具体的補償・賠償を求めて一気に高まった。若い

3世の熱情にほだされて、1世2世たちが不正で過酷な収容所の実態を語り始めたことも大きな成果だった。

1980年、日系議員とJACLの運動を受けて、ジミー R. カーター大統領は「戦時民間人転住・抑留に関する委員会（CWRIC）」を設置。全国各地で「公聴会」が開催され、1世2世750人が胸中に隠していた悲惨な個人体験を初めて証言した。成果は1983年2月24日報告書「否定された個人の正義」に纏められ、強制収用を軍事的必然とする政府見解は退けられ、人種差別による不法行為であったと断定された。連邦議会による謝罪と被収容者への金銭的補償も勧告された。

補償賠償法案運動は、何度か頓挫しながらも、日系人地域社会からワシントンへと移り、日系議員・リベラル派議員のみならず、442軍団などで実証した自己犠牲・愛国心への感銘は保守系議員をも取り込んで行った。ついに1988年、法案は下院法案442（442軍団に因む）が243対141で、上院法案109が67対27で両院で可決。かくして「市民自由法」と命名された日系アメリカ人補償法案はドナルド・レーガン大統領によって署名された。

生存者一人あたり2万ドル（当時約3百万円）の補償金が1990年11月を皮切りに配布され始めた。祖母雅子は、配布直後に往生していた祖父章秀の分と合わせ4万ドルを手にして翌年帰国、晴れやかに祖国の旅を楽しんだ。

1992年にはジョージ H. ブッシュ大統領は再び国を代表して謝罪。補償金が生存者全員に行きわたるよう4億ドルの追加割り当て法案に署名。総額16億ドルの賠償金が82,210人の元被収容者もしくはその子孫に支払われ、1999年賠償は完遂された。

2012年6月6日ロサンゼルス郡参事会は1942年の収容決議を改めて取り下げた。「正しいことをするのに遅すぎることはない」とマーク・リドリー・トーマス郡参事は付記した。「追憶の日」から64年と4か月、日系アメリカ人の不撓不屈の精神と行動は勝利した。

JACL、NCJAR、NCCR、日系議員（ノーマン・ミネタ下院議員、ロバート・マツイ下院議員、スパーク・マツナガ上院議員）、そして1世、2世、3世の和解と連帯。半世紀を超えた日系人の苦悩と煩悶は、日本的な和と忍耐の精神によって克服され、自由・平等・博愛・人権・民主主義を謳うアメリカの歴史に燦然と進歩の足跡を刻んだのである。

1世、2世、3世、そして4世以降 — 民族のプライドはメルティングポットを超えるか？

ここで、日系アメリカ市民のアイデンティティを少し社会的に考察してみる。アメリカのような人造国家・移民社会では、多種多様な歴史・文化を持って移民してくるエスニック・グループ（民族集団）は、新世界への「構造的な統合」と「文化的な同化」という2つの力を絶えず受ける。移民集団は、統合・同化の度合いの点で、アノミー（無秩序）、アンダーカースト（下部階層）、サラダボール（多様混在）、メルティングポット（るつぼ）

の4段階を呈して社会化していく。日系人の場合は、1世がアンダーカーストから這い上がって伝統を保持するサラダボールに達していたが、強制収容という強烈な被差体験を経て、モデル・マイノリティー（模範的少数派）たらんとする2世は一足飛びにメルティングポットをめざしたといえよう。移民からの立身、収容による剥奪からの再出発。日系人は2世代の困苦を超えてアメリカ中流（一部上流）市民の地歩を築いたのである。1世は古き良き日本を懐古し、2世は優等生アメリカ人をめざした。しかし3世は、2世のめざした白人的なメルティングポット理念そのものが差別的優越的な欺瞞を宿していることに気づく。また自らのルーツに関心が高まる世代でもあり、あえて民族性を色に出すサラダボール的なありかたにも惹かれる傾向を示す。3世、4世は混血も進み多様なアイデンティティーを背負っていくことになるが、その中でも *Nippon* の部分への意識はむしろ純化されて強まる。

全米に11家族いる私と同世代の従弟妹たちは3世であり、まさに日本的なルーツ探しに熱心な日系世代である。仏教、武士道、伝統文化からアニメ、ハイテクにいたるまでクール・ジャパンに魅かれてたびたび来日している。

彼らはまず経済大国（だった）日本にプライドを持つが、同時に日米戦争、戦前の日本、サムライ精神などに日本人以上に深い関心を抱いている。だからこそ、私たち現代日本人は「正しい日本の近現代史」を誇りを持って衆知しておくことが緊要なのである。弱肉強食の植民地争奪合戦であった帝国主義近代にあつて、大日本「帝国」は対米戦含め「列強」との関わりに一点の非もなかったという事実。東京大空襲・広島・長崎は大虐殺であったという事実。近現代の戦争は軍産複合体と国際金融資本主義が作為的に起こして来ているものであるという事実。そして、欧米白人国家がそれ以外の人種を隷属させようとする近代史に独り敢然と立ち向かい、世界史の流れを人類の大義へと革命したのが日本であるという事実。

これら歴史の事実を理論近代史学で明解に説くことができれば、3世、4世更に未来の日系人（特に日系アメリカ人）たちは日本の来し方を誇りをもって国際社会に証言し、さらに「日本なる歴史・文化の精髓」の行く末を「欧米近代の理想を包摂し超克して」世界へと発揮してくれる筈である。

三体の女神がほほ笑む時

金門橋をくぐる移民たちをアルカイクスマイルで迎える東洋的面立ちの自由の女神。さらにいえば、フロリダあたりにアフリカの風貌の地母神のような自由の女神。3つの自由の女神像が実現されてほほ笑み合う時、アメリカは世界にとって初めて本物の「丘の上の町（City upon a Hill）」になれるものと信じる。まず我々日本人が正しい近現代史を誇りを持って取り戻すこと、世界のただなかに本来のヤマト民族に立ち返ること。この大義が成れば、100万の日系人は故国への誇りと名誉をあらためて確信し、アメリカに普遍的な和

アメリカ「追憶の日」から
The Japanese Americans since February 19, 1946
酒生文弥

魂を吹き込んでくれるだろう。

13歳まで福井で暮らし内心「少国民」であった筈の伯父トシヒコが味わった収容所での屈辱。クライスラーのデザイン専門学校を出て、朝鮮戦争で祖国アメリカに身を挺し、二級市民から世界的な工業デザイナー（航空宇宙博物館など）へと立身していく苦難と葛藤、奮闘努力。いまは亡き伯父トシヒコのユーモアに満ちたあのほほ笑みに想う、2016年の盛夏である。